

朝から晩まで新型コロナウイルス (ASA KARA BAN MADE SHINGATA KORONA UIRUSU)

by Yoshito Ehara

SYNOPSIS: Carlo, who is a Filipino Japanese high school student, is treated in a bio-clean room due to Leukosis. Watching news on COVID-19, he sensitively perceived people's feeling about the virus. He is scared at COVID-19's sweeping the whole world. The special conditions, in which he is protected from any virus, makes him deplore himself and gives him a sense of estrangement; he, nevertheless, keeps pondering. Feeling sorrow and self-admonition to what people do to live; he is seized with destructive impulse.

朝から晩まで新型コロナウイルスという感染症の報道が続いている。

人類の新たな敵が現れたということなのか。カルロは病院のベッドの上でテレビを見ていた。新型というのだから旧型もあって、新型は恐ろしいのだろうということは容易に想像できた。国のかじ取りを担う政治家が難しそうな顔で話す。学者らしき男性が半笑いを浮かべながら新たな感染症の脅威を話す。今まで経験したことのない恐ろしいものが、すぐそばまで来ていると、カルロは不安になった。

マスクをした看護師が食事を下げに来た。

「あのう」

「ああ、新型コロナウイルスね。びっくりしちゃった、大変よね」

マスクで大半は見えないのだけれど、若い看護師は可愛かった。彼女と会えるのがカルロの楽しみだった。

「うちの病院でも、患者さんを受け入れるみたい」

「ふうん」

てきぱきと食器を整えて彼女は去っていく。カルロは名残惜しそうにその後ろ姿を見るしかなかった。病院は白かった。壁やベッドやシーツが白いだけでなく、なにか白い煙がたちこめたように、視界がぼんやりしていた。



カルロは無菌室に入院していた。白血病の治療のためだ。面会はガラス越しで、電話で会話をする。1週間前も母親が来て、カルロの境遇を嘆き、泣きながら話していた。しかしその不自由な面会も中断されている。新型コロナウイルスのためだった。

母親はフィリピン人だった。父親は日本人。日本で生まれて日本で育っているのだから日本語のほうが理解できる。母親は、家族の中でいちばん日本語が苦手だった。他の家族が楽しそうに日本語で話すのを、わかったふりをしてニコニコしていることが多かった。

その母を悲しませていることが辛かった。早く元気になって退院したいとカルロは思っていた。

ぼんやりとテレビを見て過ごすことしかないカルロは、未知のウイルスが日本を席巻していく様子が流れ、聞いたこともない難しい言葉の説明を聞いていた。危険だと言う人もいれば、それほどでもないという人もいる。感染しやすいと言う人もいれば感染しにくいので大丈夫だと言う人もいる。まだどっちなのか分からないということなのだろう。外に出ることすらかなわないカルロにとっては、どちらでもいいことなのかもしれない。

テレビでは今日何人感染者が出た、何人死亡したことを告げている。恐ろしいことだった。人が死ぬのは怖かった。大切な母や父、妹が感染しないかと不安になる。もしも自分が感染したら、一発でお陀仏だと思った。普通の風邪でも死んでしまうので、無菌室にいるのだ。テレビでは合併症がある者は死亡率が高いと報じていた。

カルロは同級生から送られてくるメールやラインの返事をしながら考えた。みな、やさしい言葉で励ましてくれるのは嬉しかったが、おそらく彼らも新型コロナウイルスの問題で大変なのだ。授業が中止になった、自宅でネットを介しての授業が始まったなどと告げてくる。そのやり取りについていけないカルロは取り残されていると感じた。病院のベッドの上の疎外感は寂しさよりも、何故か罪悪感に近い。

日本中が老若男女問わず新型コロナウイルスで大変な時に、自分は完全に近い形で守られた部屋にいる。いつもなら不自由と副作用の苦しさを嘆くだけなのだが、自分一人だけ安全圏にいる申し訳なさや、居心地の悪い安心感がまとわりついていた。

自分がどんな気持ちでいればいいのか、何を基準に行動すればいいのか、カルロは分からなかった。そんなことは生まれて初めてだった。気持ちは素直に言えばいいと、父親からは教わっていた。しかし今は、そうではないと、自分を取り巻く世界からの圧力を感じていた。

カルロの腕には点滴が刺さっていた。そこから無色透明の液体が体の中に流れ込んでくる。じわりじわりと体の隅々まで薬剤がいきわたり、癌化した白血球を駆逐していくのだ。同時にそれは、カルロの正常な細胞も痛めつける。正常な白血球が滅滅されて免疫力が低下して、あらゆる病気にかかりやすくなってしまふ。そのために無菌室が必要だった。

副作用はそればかりではなかった。前回入院した時ほどではないが、髪の毛が抜け、頭痛があり、吐き気がして食欲が低下する。体が痩せていく。筋肉が落ちて、体が細くなっていくのをカルロ自身よりも母親が心配する。

静かに体に流し込まれる抗がん剤を、カルロは鋭利な刃物のついた物体だと想像していた。鋭い突起で悪い白血球も駆逐するが、それは触るもの全てを傷つけていく。

白い部屋で空想を始めると、とめどがなかった。嫌な想像は嫌な気持ちしか生まれない。カルロはテレビをつけて現実に戻ろうとした。

テレビでは「緊急事態宣言」が発表されたことを告げていた。首相がテレビを通じて国民に話しかける。新型コロナウイルスが感染拡大したために、外出を自粛して、家にとどまって暮らさなければならないという。

カルロは、自分はずっと緊急事態宣言なのだと思った。誰とも会うことができない。会うのにも規制があり、ガラス越しでしか会えない。それは寂しいし、苦しいことだった。それを皆が味わっている。自分は一足先に、緊急事態宣言を経験していた。

感染の連鎖は自分と似た不幸を広げる。皆と違うのは、白い壁に囲まれた病室でカルロは独りきりだった。

新型コロナウイルスのことを考えた。ウイルスは生物ではないというが、丸い殻のついた細菌のイメージだ。それが人の体に入って増殖してむしばんでいく。それに人は耐え、反撃して、乗り越える者もいれば、蹂躪されて重い症状となる人もいる。人工呼吸器をつけている人もいるらしい。カルロはのどに管を押し込まれて機械で呼吸させられることを想像してぞっとした。

もしも自分が罹患したら、もしも自分の大切な家族が罹患したらと思うと、いてもたってもいられなくなる。早く恐ろしい病原菌が地球上からいなくなってほしい。



夜も更けてきた。カルロは窓に映った自分の姿を見た。ずいぶん痩せてしまった。母が心配するのも無理はない。病魔は人を変える。人間は病気に勝てないかもしれない。人間は、簡単に死んでしまう。自分もそうなるかもしれない。

寂しくなり、怖くなり、誰かと話したくなかった。ナースコールを鳴らそうかと思ったが、弱気になっている自分を見せるのは恥ずかしいと思いとどまった。

目を閉じて、眠ることにした。まぶたに遮られても、浮かんでくるのは恐ろしい感染症のことだった。

新型コロナウイルスを想像してみた。なぜかそこは宇宙だった。巨大は宇宙船から沢山の星屑が、宇宙空間を舞いおりていく。遠目では白くキラキラしている。それはゆっくりと漂い、地球という星にたどり着いた。どうして宇宙から想像が始まったのか分からず、カルロは苦笑した。枕に頭を押し付けて、想像を続けた。

大気圏に入り、最初はふわりふわりと大気の中を漂うが、人間を見つけると、突然意志を持ったように空中を直線的に移動し始める。星屑に見えたのは新型コロナウイルスだった。ふわふわとした綿毛のようなものが風圧ではがされて、全貌があらわになる。無数のグロテスクな泡状の球体が表面を覆った、有機体とも無機体とも思える恐ろしい姿で滑空する飛行物体だ。それが人間めがけて飛んでくる。

カルロの脳内の画像では、新型コロナウイルスが人間に近づくと、人が大きくなるのかウイルスが小さくなるのか、人間の鼻の穴が巨大になり、そこに吸い込まれていく。自分が想像したにもかかわらず、カルロは、嫌だと声を上げそうになった。精巧に作られた殺人マシンが体内に入っていく。

新型コロナウイルスは鼻腔の粘膜にたどり着いた。その瞬間、まとっていた小さなブクブクの球体が剥がれ落ち、太さの違う黒い針金と板を組み合わせで作ったようなブリキ細工が現れる。針金の先は鋭利にとがっていて、モーターで動くロボットのようにぎこちなく、先端を人間の鼻粘膜の細胞に差し込んだ。その瞬間、地面であったはずの粘膜は柔らかい素材に変化して、醜い黒い金属の塊が体内にゆっくりと沈むように吸い込まれていく。その姿が完全に消えてしまうと、何事もなかったような静けさが戻る。一見何も起こっていないような鼻の中の世界から、カルロの視点は細胞内に移動する。

細胞の中で、沢山の棒状の黒い鉄骨の塊のように見えた新型コロナウイルスがほどけていく。それはウイルスが破壊されていくように見えるが実はそうではない。ほどけた針状の物体が細胞の中に散らばっていく。それは静かに、ゆっくりと、誰も知らない悪意のように、とどまることがなく拡散していく。細胞の中はカエルの卵のような連なった水疱や、マングローブのようなびらびらした構造物にあふれているジャングルの様だった。ウイルスの残骸はその陰に消えていく。そして静寂が訪れる。

どれほど経ったのだろうか、変化は突然起こった。ひゅん、と金属音がしたかと思うと、張り出した植物状の構造物の裏側から細長い黒い金属が現れた。最初カルロは、先ほど消えていった残骸が戻ってきたと思ったが、悪魔の針金は次々を現れた。最初に細胞に取り込まれた数をはるかに凌駕する黒い小さな物体が視界を埋め尽くしていく。

エッチングの絵画が浮かび上がるように、細かい黒い線が視界を黒く染めていく。徐々にそれは意志を持って動き出し、つながっていく。沢山の部品が合体して、構造を作っていく。それがさらに合わさり、最初に見たブリキ細工が次々と出来上がっていった。たったひとつのウイルスから無数のウイルスが生産されていく過程だ。それはおぞましかった。一つの悪意が数えきれないほどの禍々しさを生む悲劇だった。

数百の黒いトゲトゲの塊は、小さく震えると、周囲をブドウの房のような球体が覆い始める。小さな球体が集まった姿は、悪魔の果実だった。ウイルスが動くたびに、小さな球体は変形してぷにゃぷにゃと変形するが本体からは離れない。一斉にウイルスが天井の壁に向かって移動し始める。

入って来た時と違い、ウイルスたちは強引に細胞の膜を破って飛び出していく。その度に膜は破れ、瞬時に修復するも次のウイルスが突き破る。次々に球体をまとったウイルスが突き破り続けた細胞は、その形態を維持できなくなり崩壊した。宿主とされた細胞は、お祭りの縁日で売っている水風船のようにはじけた。そこでカルロの想像も終わった。

カルロは目を開いた。恐ろしいことを想像したことを後悔していた。起き上がって少し水を飲んだ。動悸を感じた。恐怖がまだ残っている。落ち着くために、カルロは神様のことを考えた。これはもう、神様でなければ解決できない問題だと確信した。

どうして、こんな恐ろしいものが生まれたのだろうか。早く消えてなくなってほしい。それだけを祈った。

カルロは知らない間に寝ていた。人の気配で目を覚ます。看護師が食事を運んできたのだ。昨日の若いお気に入りの看護師ではなかった。少し残念だと思って「おはようございます」と声を出した。

「おはよう。昨日はよく眠れた？」

「いえ」

悪夢を見たのではなく、悪夢を想像してしまったことをどう説明していいのか言い淀んでいると、看護師はにっこり笑って去っていった。その態度に、カルロは冷たさを感じた。人の態度に敏感になっている。心が弱っているからだ。化学療養を受けていること、無菌室にいること、新型コロナウイルスの脅威が迫っていること、それらすべてが若いカルロの心をむしばんでいた。

寂しさを紛らわせるためにテレビをつけた。日本中で数百人が感染をして数十人が命を落としたことを報じていた。その死には軽さがあった。死とはすごく重いものはずだ。それなのに匿名の死は、当たり前のように報じられていた。カルロは命を奪われた数十人には、どれほどその死を悼む人がいるのかを考えた。緊急事態宣言、重症者、人工呼吸器、医療崩壊と硬くて重い言葉が続くたびに、心に重くのしかかってくる。

テレビのワイドショーでは、誰かが誰かを非難をしていた。国の政策が悪い、緊急事態宣言を出すのが遅い、このままでは経済が死んでしまうなどと怒る人がいた。

怒っている人を見ると、カルロは悲しくなった。誰かが間違っている、誰かが怠惰だ、ひどい場合は誰かのせいで人が死んでいるとさえ言う。誰もが間違え、誰もが正しいとは限らない。間違っているとされれば、弁明するだろうし、口論にもなる。勝つか負けるかの問題になる。新型コロナウイルスのせいで、世界中の人の心がすさんでいく。

感染が判明した芸能人や経営者が画面で謝罪していた。病気になって謝罪する人の気持ちを想像した。カルロは、白血病になってごめんなさいと、大勢の人前で頭を下げている自分を想像した。なぜ謝るのか分からない。誰に何を謝ればいいのか分からない。そんなことが普通になっている。不気味な感情の連鎖は止まらない。

新しい情報が次から次に流れていく。情報が刷新されるたびに振り回される。古い情報を信じている人々は嘲笑される。誰もが毎日必死に情報を追いかける。新しい常識を、いくら追いかけても、日々更新されていくスピードには追いつけない。昨日肯定されたことが今日は否定される。その情報を知らなかった人は、無能な人のように扱われる。

あらゆるものを介して悪意が伝播されていく。

新型コロナウイルスは、不幸を招くウイルスだった。人々を混乱させて、惑わせて、分断する。ウイルスは、ネットという仮想空間にも感染を広げ、人々の心を荒ませていく。世界に悪意が広がり、人の心を傷つけていく。身体も心も侵害する。

無防備なところを狡猾に攻撃してくる。どうやって、ウイルスから身を守ればいいのかだろうか。人は生きていけば、誰かと接し、情報を得なければならない。

カルロは、自分は無菌室で守られていることに気付いた。他の誰もが、この恐ろしい病原体にさらされているのだけれど、自分は守られているのが歯がゆかった。この不幸から、自分だけが取り残されていることが嫌だった。

友人からのメールやラインが減っていた。自分からラインを送ろうと思うと、気が引けた。一人だけ安全な場所から、大変な思いをしている友人に何を話せばいいのだろう。何気ない言葉が、彼らにとって気に障るかもしれない。なにもかも悪くとられないか心配になった。どうせカルロは守れているからな、と言われるのが怖くなった。

白い壁が四方を取り囲んでいた。自分はここから出られない。病原体にさらされない。鉄壁の守りの中にいる特殊な状況は、細かい金属の繊維で平滑なガラスの表面をこすった時のように、ちりちりとカルロの心に小さな傷をつけた。人と会うことのできない不幸は、ウイルスに感染しない幸福に強引に変換された。望まない状況なのだけれど、人はうらやむかもしれない。なぜなら、カルロがこの病気と闘っている辛さを知らないからだ。知らなければ、誰でも好きなように言える。でも今、我慢するのは自分の方だ。

なぜならたった一人のカルロの辛さよりも、世界中の新型コロナウイルスのもたらす不幸のほうが圧倒的に大きいのだ。不幸に乗じて、全ての価値観は一蹴される。家族で過ごすことも、握手やキスをする 것도、礼拝することも間違ったことになる。

抗がん剤を入れた点滴が運ばれてきた。看護師が気軽に話しかけてくるが、カルロは気軽に言葉を発せられなかった。管がつながれて、化学物質が体内に流されていく。悪性の細胞を殺しながら、健康な細胞も傷つけていく液体が、体の済み済みまで行き渡っていく。

カルロはなぜか恐怖を感じた。今まで一度も感じなかった拒絶したい感情が湧いてくる。それがどうしてなのか分からなかった。気持ちを紛らわせるためにテレビをつける。

物々しい宇宙服のような防護服を着た男が薬剤をまいていた。集団感染が起こった学校を消毒している光景だった。おそらく人間の体にとりつく機会に恵まれなかったウイルスは、その時点でほぼ死滅している。消毒液を吹きかけて、全てを駆逐しようとしている。新型コロナウイルスさえ出現しなければ、そこで普通に繁殖していた細菌は死滅させられる。そこまでして人間は、生きていかなければならない。

カルロは発作的に、腕に刺さっていた点滴を抜いた。



ここまでして生きていこうとしなければならないのか。何かを根こそぎ滅亡させてまで生きていかなければならないのか。大事なものを全て捨てて、生き残らなければならないのか。

床頭台から鏡を取り出して自分の姿を見た。髪の毛が抜け落ちて、痩せた自分の顔が見えた。生存をかけて、病と闘っている自分の姿だった。高度な技術で生成した化学物質を使って、体の中の白血球を殺すことで生きていく選択をした男の姿だった。

初めて病気を告げられた時は、どうして自分なのかと戸惑った。そのあと死んでしまうことが怖くなった。家族と会えなくなることが恐ろしかった。そのためなら、どんな苦しい治療でも耐えようと思った。好きなことができなくなっても、死ぬよりはましだと思えた。この苦しい試練を乗り越えることに意味を見出そうとした。運命を神にゆだねようとした。

生きていくために人は、それまで大切にしていたことも、それまで寛容できたことも、失ってもいいと思える。名前も知らない人なら傷つけても、自分と関わり合いない人なら排除しても、自分以外の生命体を死滅させても平気になれる。

その恐ろしさに飲み込まれそうになる。母の顔が浮かぶ。テレビを消して、ベッドにうずくまった。

しばらく目を閉じてから、手を伸ばしてナースコールを鳴らした。

「どうしました？」

あの可愛い看護師の声だった。

「あの、点滴が抜けちゃって」

「分かりました。すぐ行きます」

点滴を無理やり抜いた腕から血がにじんでいた。それは生きている証でもあり、血漿成分が止血する生理現象の結果であり、一時的な化学療法の失敗を意味していた。シーツににじんだ血の不整形のしみは、新型コロナウイルスに見えた。